

## 寄生蟲學に於ける五島先生の御貢獻

森 下 薫

隱然重きをなすと云ふ言葉は、我國寄生蟲學界に於ける五島先生の場合を最も適切に云ひ現して居ると思ふ。ともすると華かな場面を作り上げ易い寄生蟲學なる學問の寮圍氣の中にあつて、自己としては極めて地味な仕事をされ、如何にも動物學者らしく終始せられたことは先生の御人格の現はれであるが、同時に其お仕事の堅實さを物語るものである。併し一方先生は後進又は他領域の學者を通じて實に華々しい活動をして居られたと云ふことが出来る。即ち御自身に於ては極めて地味な着實な道を辿られたのであるが、近世に於ける華々しい我國寄生蟲學發達の裏面に於ける先生の御貢獻は實に莫大なるものがあるのである。先生の指導に依つて成長した新進の寄生蟲學者に依つてなされた數々の業績は何れも我國寄生蟲學完成への重要な礎石となつて居るが、之等の業績は取りも直さず先生のお仕事はそれらの人を通じて造影せられたものとも云へる。又他領域殊に醫學方面への良き adviser としての先生の存在は、特に飯島先生なき後の我國に於て不可缺のものであり、其 advice 又は suggestion を受けた業績は枚舉に遑がない位である。先生の御功績が我國寄生蟲學史に燦として永遠に輝くであらう所以のものは、此匿れたる御貢獻に據るべきものゝ少からざるを信ずる。

茲に先生の御業績に就て申述べんとする。門下の身として甚だ僭越の嫌が少くないのであるが、先生の御徳を回顧しその御功績への欽仰に他ならない意味に於て先生もお許し下さることと思ふ。

先生御自身のなされた寄生蟲學上のお仕事は必ずしも多いとは云へない。併し其悉くは先生一流の堅實さを以つてなされたもので何れも珠玉の輝がある。即ち先生のお仕事は量よりも質にある。先生は一般の parasites に就て關心を有つて居られたことは勿論で、其指導せられた範圍は極めて廣汎であるが、何と云つても Trematoda に關しては我國に於ける第一人者であられたと思ふ。先生が自ら手を下された論文の殆ど悉くが Trematoda に關するものである點から觀ても、先生のこれに關する御造詣と御自信とを察することが出来ると共に、他のものに就ては——勿論先生程の學識を有つて居られたのであるから何をやられても立派なものに相違なかつたであらうが——殆ど論文として公表されて居ないことは、先生の御慎重さと御謙遜とを物語るものと云ふ可きである。

先生が寄生蟲學に入られたのは飯島先生の感化に依ることを充分推察し得る。飯島先生は明治15年22歳の若冠を以つて渡歐、當時寄生蟲學の大本山 Leipzig 大學の LEUCKART の下で寄生蟲學を修められ、同18年歸朝、我國に始めて系統立つた寄生蟲學を移植され、新進氣鋭の學者として人體寄生蟲を始め各種の寄生蟲に關して幾多の業績を出されたのであるが、其御活動の華々しい時に動物學教室に席を置かれたのが五島先生である。されば飯島先生の suggestion に依つて *Diplozoon* の研究に手を染められたのが先生をして遂に Trematoda 學者として大成せしめた動機であつたであらう。

先生初期の御研究は Trematoda でも Monogenea に關するもので、これに最も力を入れ

られ、結局先生の寄生蟲學に於けるお仕事の最重要なものとなつた。次の諸研究が夫である。

- 1) 1890: On *Diplozoon nipponicum* n. sp. Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 4 (1), 151—192.
- 2) 1891: On connecting canal between the oviduct and the intestine in some monogeneic trematodes. Zool. Anz., 14, 103—104.
- 3) 1893: Der LAURERSche Kanal und die Scheide. Centralbl. Bakt. u. Parasit., 14, 798—801.
- 4) 1894: Studies on the ectoparasitic trematodes in Japan. Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 8(1), 1—273.
- 5) 1899: Notes on some exotic species of ectoparasitic trematodes. Ibid., 12(4), 263—295.

第一番目は先生の卒業論文で少くとも寄生蟲に關する處女作であるが、此論文で既に先生の觀察眼の透徹して居られた事が閃めいて居る。*Diplozoon* は淡水魚の鰓に寄生し、奇妙なことには幼時獨立して生活を營むが、成熟期前に至つて2個體がX字形に相接着して終生分離しない。歐洲に於けるものは *D. paradoxum* として古くより多くの研究者の注目を惹いて居り、殊に ZELLER の研究に依り多くの點が明かになつて居たが、其 anatomy 殊に histology に就ては尙知見が充分とは云へなかつたので、飯島先生の suggestion で日本の材料に就き再檢を企てられたのである。我國のものは鮎の鰓に稀れならず見られる。先生は最初我國のものも歐洲のものと同種であらうと考へて居られたが、研究の結果新種と判明、*D. nipponicum* と命名せられたのである。本蟲の接着が永續交尾であることは既に ZELLER も云つて居たのであるが、兩個體の生殖器相互の關係に就ては先生に依り従來の考に大いに過誤のあることが明かにされた。ZELLER は LAURER'S canal は他體の vas deferens と直接連結して居ると考へて居たが、先生は連續切片を精細に檢査せられた結果、ZELLER の説を訂正せられ、ZELLER の LAURER'S canal なるものは生殖腸管 Canalis genito-intestinalis に他ならず、且つ vas deferens は他體の yolk duct に直接連結せることを明かにせられた。

之に引續いて先生は我國に於ける Monogenea に關する廣汎な研究に着手されたのであるが、其間先生の御研究の一目標となつたのは前述の生殖腸管である。これに就ては上述の *Diplozoon* に於ても注意して居られたのであるが、多くの種類を研究されると共に従來決定的でなかつた學説を明確に裁斷されたのである。Monogenea の生殖腸管が輸卵管と腸とを連結せるものであることを始めて云はれたのは飯島先生(1884)であるが、此管は従來輸卵管と睾丸とを連らね、自家受精に役立つものと考へられ、internal vas deferens と稱せられて居たのである。飯島先生の所見は DIECKHOFF, R. WRIGHT, MACALLUM 等の賛成を得たが、尙一般には承認を得ない状況にあつた。五島先生は多數の種類に就て精細な觀察を遂げられ、飯島先生の所説を確乎たるものとされたのである。且つ従來此管に就て一部で Canalis vitello-intestinalis なる名で呼ばれて居たのを、先生は此管が輸卵管とは何ら關係のないことを明かにされて、このため American Naturalist の editor が始めて用ひた Canalis genito-intestinalis なる名稱を可として採用され、爾來此名が用ひられて居るのである。又此管の homology に就ては従來明確にされて居なかつたが、之は Digenea の LAURER'S canal に、又 *Aspidogaster* の卵黄囊に、更に *Amphilina* の前行盲腔に相當するものであり、又 Monogenea

に見る腔は條蟲類の子宮に、條蟲類の腔は吸蟲類の子宮に相當するものであると道破された。是等のことは前掲御論文の(1)―(5)を貫いて主張して居られる所で、其論據には極めて精細周到なる解剖學的及び組織學的觀察があるのである。

1894年先生御苦心の結晶(4)“Studies on the ectoparasitic trematodes in Japan”が世に出た。本文273頁、圖版27葉の大冊である。本研究には4箇年の歳月を用ひられ、廣く我國海産魚類から材料を蒐集され、整頓同定されて10屬30種とせられた。即ち *Microcotyle* 屬8種、*Axine* 屬3種、*Octocotyle* 屬2種、*Diclidophora* 屬4種、*Hexacotyle* 屬2種、*Onchocotyle* 屬1種、*Calicotyle* 屬1種、*Monocotyle* 屬1種、*Epibdella* 屬2種、*Tristomum* 屬6種で、大部分は新種である。是等に就て其解剖、組織に就て極めて精密なる比較研究を遂げられ、又生態及び生理上の所見に及ばれた。又其圖版は先生一流の巧致を極めたものである。全篇を貫いて其論議は斬新堅實、眞に當時稀に見る大雄篇であつた。本論文が公にせられるや、歐米學界は舉つて嘆賞、歡迎したと云ふ。實に我國は更なり、一般 Monogenea 研究の standard として今日尙ほ燦然たる光輝を放つて居る。先生は此論文を提出して理學博士の學位を獲得された。明治28年のことである。

1899年御發表の外國産 Monogenea の研究(5)は北米東海岸及び歐洲の材料で、記載されること9屬12種(内7種は新種)、即ち *Phyllonella* 屬1種、*Epibdella* 屬1種、*Tristomum* 屬1種、*Microcotyle* 屬4種、*Acanthocotyle* 屬1種、*Dionchus* 屬1種である。此論文は1895年 Leyden に於ける第3回萬國動物學會で公表されたものを骨子としたものである。

かくして先生は Monogenea に關して動かす可からざる世界的大家となられたのである。先生の是等の御努力は遂に我國學界の最高名譽たる帝國學士院賞となり、前掲(1)―(5)の論文を一括した「我國に於ける外部寄生吸蟲類の研究」に關する功績に依り、大正2年7月5日我國寄生蟲學關係最初の榮譽を擔はれたのであつた。

外部寄生吸蟲に就ては其後次の1篇を公にして居られる。

- 6) 1917: Two new trematodes of the Family Gyrodactylidae. by Goto and H. Kikuchi. Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 39, (4), 1—22.

これは菊池一氏との共著で、邦産スズキの鰓に普通な *Dactylogyrus* の1新種とアイゴの鰓に普通の *Tetrancistrum* (新屬) の1新種に就ての記載である。これで先生の Monogenea に關する御研究は終つて居る。

其後の先生の御研究は Digenea に向はれたのであるが、これは寧ろ指導に重きを置かれたもので次の數篇がある。

- 7) 1918: On *Dissotrema papillatum*, n. g., n. sp., an amphistomoid parasite from a marine fish. by Goto and Y. Matsudaira. Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 39(8), 1—19.
- 8) 1919: *Dissotrema* synonymous with *Gyliauchen*. Jour. Par., 6, 44—47.
- 9) 1929: Brief notes on new trematodes. I. by Goto and Y. Ozaki. Jap. Jour. Zool., 2, 213—218.
- 10) 1930: Brief notes on new trematodes. II. by Goto and Y. Ozaki. Ibid., 2, 369—381.

11) 1930: Brief notes on new trematodes. III. by Goto and Y. Ozaki. *Ibid.*, 3, 73—82.

(7) 及び (9) は邦産アイゴの直腸に寄生する双口吸蟲の1種で、これは最初先生の指導に依つて松平康良氏が卒業論文として研究に着手されたものであるが、卒業後間もなく病のため長逝されて未だ世に出る機會のなかつたものを先生が更に標本を檢され、附圖を自ら描畫されて出版されたもので、先生の門弟に對する御溫情の現はれに他ならない。これを新屬新種として *Dissotrema papillatum* と呼び、特異な形態に基いてこれのため1新科 *Dissotrematidae* を提案されたのである。翌年 *Dissotrema* なる屬は NICOLL の *Gyliauchen* と同一物と云ふことを知られて直ちに訂正せられ、今日では *Gyliauchen papillatum* (GOTO et MATSUDAIRA) として知られ、*Amphistomata* でも特殊の位置にあるものである。

尾崎佳正氏が先生の助手として入室せられるや(大正11年?)、先生の指導に依つて専ら吸蟲類特に *Digenea* の研究に没頭せられ、*Gasterostomata* に關するものを始め幾多の貴重なる研究を發表せられ、ために我國の吸蟲類に關する知見は非常なる進歩を見せたのであるが、これは先生の御嚴格なる御指導と、豊富なる文獻とを背景として居たものであることを見逃すことが出来ない。又先生は其一部を同氏と共著で發表して居られる。前掲御論文(9)―(11)がそれである。そのIでは *Mesocoelium* の3種を(内2新種を含む)、IIでは *Atractotrema* の1種、*Trigonotrema* の1種、*Hexangium* の1種、*Plehnia* の1種(以上總て新屬新種)を、IIIでは *Phocitrema* の1種(新屬新種)、*Lebouria* の1新種、*Mesocoelium* の3新種、*Tetracotyle* の1新種を記載して居られる。之より曩先生は次の1文を公にして居られる。

12) 1926: Some points in the life history of hookworms. by Goto and J. Asada. *Proc. 3rd Pan-pacific Sci. Cong. Tokyo*, 2547—2552.

これは今滿洲衛生技術廠に居られる淺田順一博士との共同作業であるが、當時鉤蟲類の感染經路及び發育史に就て從來の學說に對する疑義が起り、我國で横川・宮川兩博士間に論争が続けられて居て學界の注目を惹いて居たのであるが、これに關し、先生の見解を申述べられたものである。此論文は後にも先きにも先生が吸蟲以外の寄生蟲に就て發表された唯一のものである。

間もなく先生は御停年で教室を退かれたので御自身の御仕事は以上で止んで居るが、爾來専心後進の指導に當られたのである。即ち東大傳染病研究所の石井信太郎博士の如きは先生の御指導に依つて *Didymozoon*、鳥類寄生吸蟲等に就て興味ある仕事をして居られる。尾崎佳正氏は廣島に轉じたが、其後と雖も勿論孜々として吸蟲類の研究に従事して居られることと思ふ。前述淺田順一博士も動物學教室在席中に引續き傳研時代も先生の指導を受けられた筈である。福井玉夫博士は我國の *Amphistomata* を研究整備せられ其他一般吸蟲・鉤頭蟲に就て多くの仕事をして居られるのであるが、主として五島先生に師事して居られた。以上の人達の將來我寄生蟲學界に於ける活躍は期して俟つべきものあるを信するのであるが、是等は其背後に嚴格にして溫情を湛へた先生の御眼差を何時迄も感じられることであらう。

尙ほ先生の指導に依つて寄生蟲の研究に従事した人に、蛾の吸蟲の高木正得氏があり、*Acanthocephala* の梶原一雄氏があるが、高木氏は家事の御都合で、梶原氏は醫學に轉身せられたため、夫等の仕事の一時中止の形となつて居ることは遺憾である。又、原田五十吉氏は

*Acanthocephala* の研究を始められ、今尙ほ之を續けて居られるのは此部門に専門家の少い我國として誠に力強い次第である。

先生が日本寄生蟲學會の設立に非常に御盡力されたことは周知の事であるが、或は先生の如き、動物學・醫學兩方面に重きをなされた方が居られなかつたら、此學會の設立もさう容易でなかつたかも知れないと思ふのである。先生が一種の重みであられたため、其處に中心と云ふものを感じ、比較的容易に同志を糾合し得たのではあるまいかと思ふ。

大正10年の秋(11月12日)、巢立つた許りの黄吻私らが、寄生蟲に興味を有する者の集りを作らんとしてほんの周圍のみの同志を集め、第一回講演會を動物學會の例會の形式で催したのであつたが、先生に其趣旨をお話し申し上げ御指導をお願いした處、直ちに賛意を表して下され、當日は態々開會の辭と共に、會の趣旨を御紹介下されたのであつた。演ずるもの動物學・醫學・獸醫學方面の人士、題数は8題、出席者約61名で動物學教室としては當時として稀な盛會であつたのは愉快的想出である。要するに先生の御理解と御庇護があつたからである。後大正12年4月第二回を催した時も盛會であつた。其後東京寄生蟲學集談會と云ふものが結成され始めて寄生蟲學に關する集りとして形態づけられたのであるが、之には宮島幹之助先生の御力添へが少くなかつたが、五島先生も依然御援助下さつたのである。此會は其後先生始め諸學者の御力に依つて遂に今日の日本寄生蟲學會と迄成長した。かくして今日の隆盛を見た道程に於て初期から悉く五島先生のお力が加はつて居るのである。日本寄生蟲學會結成の氣運が醸さるゝや、昭和4年2月13日東京在住の發起人からの召集に依つて東京に創立委員會が催されたのであるが、先生は座長として同會の成立に非常な斡旋をされ、續いて同年4月第一回總會に於て最初の會長を勤められたのであつた。爾來御在世中は毎回總會に出席せられ、黙々として諸講演を聞き入れ乍ら、實に會場に千鈞の重みを加へて居られたのである。

此間更に先生の非常な御努力になつたのは人體寄生蟲和名統一に就てであつた。昭和4年の總會で緒方博士等より提案あり、之が必要が認められて委員會を作ることゝ成り滿場五島先生を委員長に推し、爾來昭和8年の福岡の大會に至る迄、此困難な問題を良く處理せられ、此處に他學科に魁けて用語の統一を見たのであるが、此間の先生の御苦心は非常なものであつたらうことを恐察するのである。

かくの如く先生は我國寄生蟲學の發達史とは離し得ない御存在であつて、飯島先生が寄生蟲學を我國に持ち歸られて以來、今日の隆盛を見る迄、終始之に關與して居られたのである。先生は今日の光輝燦然たる本邦寄生蟲學界を後に遺されて御満足のことゝ拜察する。

私自身先生より受けた御恩願は實に莫大なるものがある。夫は學問的にも精神的にもである。卒業論文を出題して頂く時は丁度先生は御外遊中であつた。私の研究は「日本産兩棲類及淡水魚類の寄生線蟲類」と云ふ大きな問題でこれは飯島先生から頂戴した Thema であるが、間もなく歸朝せられた五島先生からそれに就て直にお話のあつたのは、飯島先生から同先生にお話があり、同先生に私の指導を御依頼になつたのであらうと今でも思つて居る。この仕事に従事した中頃、突如飯島先生は御他界になり、私は名實共に先生の御指導を受けることになつた。論文は無尾兩棲類の線蟲類に局限して作り上げ、先生の御校閲を得て提出した

のであるが、これは後先生の御骨折りで、當時御編輯方針の改正された東大理學部紀要の Section IV, Zoology, Vol. I, No. 1 (1926) の巻頭に登載して頂いたのである。誠に破格の光榮であつた。爾來動物學教室大學院在席中は更なり、北里研究所に移つて宮島先生の傘下に馳せてからも、又現在の場所に轉じてからも、先生は依然として御指導下さつたのである。否先生の御病臥される時迄御面倒を煩はして居た私であつた。私の *Trypanosoma* に関する論文——これは既に其原稿に於て先生の御懇切を極められた御加筆に與かつたのであるが——それが先生御編輯の Japanese Journal of Zoology に載せて頂くことに成り、其校正をお始め下さつた途中で先生は再起を約束されない病臥のベッドに赴かれたのであつた。校正に御面倒をお煩はししたことを知つたのは先生御逝去後であつた。遠隔の地にある身を嘆いたことであつた。此論文の原稿は先生最後の御加筆になつたものゝ一つとして、御遺族の御懇望に依つて記念のため五島家に保存されることになつたのは誠に光榮であると共に、先生が御他界後迄御慈しみ下さる様な氣がしてならないのである。

先生を失つて我寄生蟲學界も巨星墜つたの感が深い。併し、先輩新進共に多士濟々である我學界の前途は、先生のお力を感じつゝ益々進展して行くことであらう。然れば以つて先生に瞑して頂けることと思ふ。

## 人體寄生蟲學と五島先生

宮川 米次

**善き指導者としての五島先生** 吾國に於ける人體寄生蟲學の進歩、科學的研究の寄與は、決して他のそれに劣るものでないのみならず、世界に誇るに足る數多の大發見によつて日本の寄生蟲學なるものは蓋し此方面の學徒の耳目を聳動せしものがある様に思はれる。斯くの如き長足の進歩發達を爲すに至つた原因には色々の事が考へられる。地の利を得て居ること、この地の利を善く活用した多くの學者の輩出のあつたこと、又是等の研究者を善く指導した先覺の士のあつた事等にあらうと思ふ。吾が五島先生は實にこの善き指導者の一人であられたことは、何人にも異議はあるまい。吾國の人體寄生蟲學の端緒がベルツ先生の多くの臨床的所見、飯島魁先生の條蟲に関する研究、五島先生の吸蟲類に於ける大業績等にあつたことは申す迄もない。之によつて同好者は大いに啓蒙せられたのみならず、多くの興味をも唆られたことも否むことの出来ない事實である。由來醫學を修めたものが寄生蟲學などを探らうとする時には、常に動物學的素養の足りないことを憾みとするものである。斯かる際飯島先生、五島先生の如きは實に吾等の善き指導者であるし、心からなる相談相手にもなつて頂いたものである。私等が大正4年以來恙蟲の動物學的研究を爲すに當つて、常に先生より極めて適切なる助言を與へられたことが、如何に力強いものであつたかは思ひ出すだに嬉しい極みである。茲に尙一つのよい例を示し、先生が如何によい指導者であつたかを語らうと思ふ。明治44年横川定氏が新小吸蟲を發見し、桂田富士郎氏はその始め之に「ヘテロフィエス、ヨ